

東原遺跡 IV

HIGASHI HARA SITE

—中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う試掘調査報告書—

1995・3

長野県飯山市教育委員会

東原遺跡 IV

HIGASHI HARA SITE

—中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う試掘調査報告書—

1995・3

長野県飯山市教育委員会

例 言

- 1 本書は長野県飯山市大字照岡字東原に所在する東原遺跡試掘調査報告書である。
- 2 東原遺跡は昭和24年にa～cの3地点が発掘調査され(第一次調査とする)、昭和27年にも桑名御郵便局の地点が発掘されている(d地点・第二次調査とする)。また、平成6年にはe地点(第三次調査)の試掘調査が行われており、今回の調査地点をd地点(第四次調査)とし、本報告書は「東原遺跡IV」として報告するものである。
- 3 調査は、平成6年度中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う試掘調査であり、長野県北信地方事務所より委託を受けた飯山市教育委員会が、平成6年10月7日から11月15日まで実施した。
- 4 今回の発掘地は過去の削平および湿地帯であったため遺構は検出されていないが、地山面および置土層から縄文時代の遺物と中・近世の遺物が少量出土している。
- 5 発掘調査は以下に掲げる組織で実施した。

飯山市遺跡調査会(平成6年度)

顧問	小山 邦武	市長
会長	滝沢藤三郎	教育委員会委員長
副会長	水野 光男	社会教育委員長
委員	高橋 桂	文化財保護審議会長・日本考古学協会会員
	田中 広司	議会総務文教委員長(平成6年12月11日退任)
	藤巻 泰雄	議会総務文教委員長(平成6年12月12日就任)
	中村 敏	公民館長
	小川 幹夫	教育委員会委員長職務代理
	岩崎 彌	教育委員会教育長
事務局長	月岡 保男	教育委員会教育次長
事務局次長	町井 和夫	教育委員会社会教育係長
事務局員	望月 静雄	教育委員会社会教育係
事務局員	川口 学実	

調査団

団 長	高橋 桂	飯山北高等学校教諭
総括担当	望月 静雄	教育委員会事務局職員
調査員	常盤井智行	
	桃井伊都子	
	田村 湜城	
	小林 新治	

作業参加者(順不同)

宮本鈴子・万場義秋・小出まさ子・石沢悦次・竹内大五郎・北条辰男・小林経雄・樋山巖・山崎満枝・田中朝治・市村ますみ・土屋久栄・渡辺金治・鈴木操・鈴木ため・滝沢きよえ

整理作業参加者(順不同)

小林みさを・小川ちか子・藤沢和枝・川口学実

- 6 本書で使用された方位は磁北である。
- 7 本書の作成は、高橋桂調査団長指導のもと、常盤井智行が主体となって行った。図面トレースは小川ちか子・藤沢和枝・常盤井があたり、遺物実測は常盤井があたった。文責は目次に記した。
- 8 発掘調査にあたっては、地元桑名川の小田切祥時園場整備実行委員長、平田辰夫万場区長、樋口伸一、小田切周一、佐崎実円、小田切資郎各氏のご協力を得た。また、現在山梨県在住の小田切茂氏には、過去の調査についてのご教示を得た。なお、報告書の作成にあたっては、中野市歴史民俗資料館の中島庄一氏には縄文土器についてのご教示を得た。記して感謝申し上げる。
- 9 発掘調査の図面・出土品は、市内大深の飯山市埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

例 言

第1章 遺跡の位置と環境	1
1 遺跡の位置と環境	(望月静雄) … 1
A 地理的環境	1
B 歴史的環境	1
第2章 調査経過	3
1 調査に至るまでの経過	3
2 調査経過	(常盤井智行) … 4
3 調査日誌抄	(川口学実) … 4
第3章 遺跡の概要	5
1 遺跡の概要	5
A 過去の調査と研究	(高橋 桂) … 5
B 昭和24年出土遺物	(常盤井) … 7
C 万場古墳	11
2 調査区の概要	13
A 調査区の位置と地形	13
B 試掘坑の概要	13
C 出土遺物	15
第4章 まとめ	(高橋) … 16

写真図版

第1章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と環境

A 地理的環境

東原遺跡は、長野県飯山市大字照岡字東原に所在する(図1)。

甲信国境に源を発する千曲川が、信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると、千曲川は信越国境の峡谷地帯(通称市川谷)を下刻曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改め、いわゆる津南河岸段丘群を形成しやがて日本海に注ぐ。

東原遺跡は、飯山盆地を流下した千曲川が峡谷地帯を流れる左岸に立地している。この付近は兩岸まで山地がせまりほとんど平坦地はないが、遺跡の所在する東原地籍は千曲川の河岸段丘や凹地が存在し、狭小な平地を形成している。遺跡はこのうち千曲川の形成した河岸段丘面に立地し、現在では遺跡の一部が千曲川の攻撃斜面によって削除されている。

遺跡の範囲は、住宅等が建てられており明確ではない。過去の調査・研究によれば旧桑名川郵便局が建てられている場所を中心として微高地全面に広がるらしい。西北側は約100mで通称岡山上段と呼ばれる高位段丘面の段丘崖に接するが、その間は凹地状の湿地帯が広がる。なお、北東側には小河川が千曲川に注ぎ低地となっている。

東原遺跡は、このように千曲川に面した段丘面に位置し、北東を小河川、西側を低湿地によってそれぞれ囲まれ、独立した丘陵上に占拠していたのである。

なお、西側の低地のほぼ中央をJR飯山線が走っている。

B 歴史的環境

信越国境の千曲川峡谷地帯における埋蔵文化財包蔵地はいまひとつ明確でないのが現状である。これは多くが山林であり遺跡の所在が明確でないこと、大規模開発に伴う調査が少なかったことによる。近年、通称岡山上段地域において関東農政局による農地開発が行われ、それに伴う調査で多くの遺跡が確認された。また、野沢温泉村では村史編纂や国道バイパスに伴う調査によって遺跡の所在も徐々に判明してきている。以下に大まかではあるが年代別に説明したい(図1)。

旧石器時代 飯山盆地から栄村・新潟県津南町にかけては、旧石器時代の遺跡が密集することで知られている。東には栄村小坂遺跡、飯山盆地内には飯山市太子林・日焼・上野・関沢の各遺跡など著名な遺跡が多い。図1はそうした遺跡の中間地帯にあたり、飯山市新堤(14)・トノ池南(19)遺跡、野沢温泉村蔵平遺跡(36)などは石器群も豊富である。特にトノ池南遺跡は、エンド・スクレイパーを主体とする石器群で注目されている。今後ともこの地域に良好な旧石器時代の遺跡が発見される可能性が高い。

縄文時代 最古の縄文時代遺跡としては、飯山市カササギ野池遺跡(8)で爪形土器が発見されている。飯山地方では最も古い縄文遺跡である。そのほか、大原・鳴沢頭(14)遺跡で表裏縄文土器や押型土器が発見されている。遺跡の規模は小規模である。中期には野沢温泉村岡ノ峯(28)・平林A(29)・二座(35)、飯山市向原遺跡などがある。そして、後期・晩期になると東原遺跡をはじめ、野沢温泉村蔵平・岡ノ峯など遺跡数は少ないが大規模で豊富な内容を持つ遺跡が現れる。蔵平・岡ノ峯遺跡では石棺墓が発見され、縄文時代の墓制研究の重要な遺跡となっている。



- | | | | |
|--------------|----------------|-----------------|----------------|
| 1 | 2 下り尾 (縄) | 3 西大滝 (縄) | 4 大滝城 (～安土焼山) |
| 5 雨池 (縄) | 6 藤原の尾 (縄) | 7 作摩 (縄) | 8 カサヤク野池 |
| 9 水の宮 (先・縄) | 10 ノリハンザ (先・縄) | 11 温井城 | 12 長楽清水 (平・中) |
| 13 カツギ池上 (平) | 14 嶋沢原 (縄・平) | 15 新橋 (先・縄・平) | 16 中野谷池 (先・平) |
| 17 温井 (仮称 先) | 18 トノ池 (先・平) | 19 トノ池原 (先・縄・平) | 20 西外峰 (先・縄) |
| 21 上塚 (先) | 22 カツギ池 (縄・平) | 23 下塚 (平) | 24 雨池グラウンド (先) |
| 25 中外 (先・縄) | 25 坪山 (縄) | 27 重地原 (縄) | 28 奥ノ厩 (縄) |
| 29 平林A (縄) | 30 平林B (平) | 31 奥生A (平) | 32 奥生B (縄) |
| 33 アサヒラ (縄) | 34 池ノ平 (縄) | 35 二座 (縄) | 36 殿平 (縄) |

図1 調査地の位置と周辺の遺跡

弥生時代の遺跡は、飯山盆地を北限として本地域には確認されていない。大型蛤刃石斧や弥生式土器細片が採集されることもあるが、断片的に出土したとしてもそれが生活していたと証する資料とはいえないと考えている。現在のところ、水稲耕作を新たに生業に加えた弥生文化は当地方まで波及しなかったと考えられるのである。ちなみに対岸の野沢温泉村や北に接する栄村においても、弥生時代の明確な遺跡はないのである。

古墳時代の遺跡も確認されていない。ただし、東原遺跡に近接した馬場地籍には二基の古墳が確認されている。また、JR飯山線の敷設に際して、付近より土取りした時に勾玉や直刀が発見されているので、そのほかにも古墳が存在していた可能性が高い。これらの古墳については、生産基盤を有していた結果と視るよりも街道との関係で築造されたとする意見が強い。

平安時代になると再び遺跡が多く確認されている。飯山市長者清水(12)・新堤・トトノ池南遺跡、野沢温泉村虫生A(31)、平林B(30)遺跡などである。いずれも小規模で、集落を形成していたかどうかは不明である。

引用・参考文献

飯山市教育委員会 1986 「飯山の遺跡」

野沢温泉村教育委員会 1994 「蔵平遺跡」

第2章 調査経過

1 調査に至るまでの経過

- 平成5年9月16日 中山間地域農村活性化総合整備事業にかかる東原遺跡の現地協議を行う。
- 10月26日 長野県教育委員会教育長より回答がある。
- 1 東原遺跡の保護については、工事に先立って遺跡の範囲や性格を把握するために試掘調査を実施する。
 - 2 試掘調査に伴う経費については、北信地方事務所を負担とする。ただし、農家負担分については文化財保護行政側が負担する。
 - 3 試掘調査は、飯山市教育委員会に委託する。
- 平成6年7月1日 北信地方事務所長より「埋蔵文化財試掘調査について(通知)」が提出される。委託契約書を締結。
- 8月19日 北信地方事務所長より文化財保護法第57条による埋蔵文化財発掘通知が市教育委員会に提出される。
- 9月9日 文化財保護法第98条による埋蔵文化財発掘通知を文化庁長官宛提出する。
- 9月9日 県教育長より北信地方事務所長宛に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」がある。

2 調査経過

今回の試掘調査は、中山間地域活性化整備事業の圃場整備に伴う試掘調査であった。対象となった東原遺跡は範囲がいまひとつ明確でなく今回対象である西側まで範囲であるのかははっきりしていなかった。ただし、西の山麓には馬場古墳が二基存在し、東原遺跡の範囲外としても古墳時代の遺跡が所在する可能性もあった。このため、とりあえず試掘調査を実施して、遺跡の存否を確認しようとして実施したものである。

対象地は水田がほとんどであるが、その大半が休耕田となっていた。また、一部の微高地や山麓を除いて湿地地帯であった。このため、遺跡が存在している可能性の高い微高地を試掘調査対象として選定した。試掘坑は微高地全体に任意に設定した。調査手順は重機が入らないので手掘りによる表土はぎを行ったのち、ジョレン・移植ゴテで慎重に精査をした。土層観察は適宜断ち割り調査を行った。写真は白黒とカラーを35mmフィルムで適宜撮影をした。測量は1/300平板図を作成した。

3 調査日誌抄

平成6年

- 10月7日(金) 器材搬入。小田切祥時圃場整備委員長と現地確認。
- 10月12日(水) 西部高台刈りはらい及びトレンチ設置。補場整備委員長所有水田にテント設置。刈りはらい地2ヶ所1m四方の試掘をする。20cm下で地山が出る。遺物なし。
- 10月13日(木) 試掘調査、上段の試掘坑は遺物なし。下段の微高地北端試掘坑で縄文土器一片出土。
- 10月14日(金) 北端試掘坑を拡張。元豊通宝出土。下段中央の試掘坑を南へ延長。遺物・遺構なし。
- 10月28日(金) 試掘調査続行。
- 11月1日(火) 万場古墳測量準備。
- 11月2日(水) 万場古墳測量開始。試掘調査続行。
- 11月8日(火) 対岸、野沢オートレース場より遺跡遠望写真撮影。
- 11月9日(水) 万場古墳測量完了。
- 11月10日(木) 手掘りによる試掘調査続行。地山と思われていた黄褐色粘質土層は埋土と判断した。ここは沢地を埋め立てて畑にした所と思われる。
- 11月11日(金) 試掘調査続行。遺物なし。西は田の床土がなく、耕作土の下は泥土である。西端は灰色の砂が地山。南北は3ヶ所で断ち割り、置土の下は滞水する泥土。
- 11月14日(月) 試掘調査完了。1/300実測図にとりかかる。
- 11月15日(火) 1/300測量図へ高さを入れる。器材の撤収を行い現地作業終了。

第3章 遺跡の概要

1 遺跡の概要

A 過去の調査と研究

明治23年県道谷街道（大正9年国道10号線昇格、現国道117号線）が起工され、翌明治24年竣工した。この谷街道は、桑名川では東原丘陵地の中央部よりやや西側を南北に削り取って敷設された。「岡山村史」で江口善次氏は、「注意する人あったならば何か採集出来たであろうと思われるが、当時注意されずに終ったらしい」と述べられている。明治29年宮沢甚三郎氏が、人類学雑誌第12巻128号に「北信地方の石器時代遺跡」として旧下水内郡、下高井郡の遺物を紹介している。もし、東原で遺物が採集されていたならば、当然宮沢氏の紹介するところとなったことであろう。

東原遺跡が好事家の注目を集めるにいたるのは、県道谷街道が開削されてから30年ほど経過してからであった。大正10年代初頭、飯山鉄道が、桑名川の湿地帯を北東に向けて敷設されることとなった。この鉄道敷設に際し、湿地帯であるが故に線路を土盛りすることが必要となった。その土盛りの土砂の採取地として目を付けられたのが、小高く盛りあがった丘陵状の小台地の東原地帯であった。当時、谷街道敷設により台地の一部は開削されていたが、台地の北方の道路両側は小高かったようである。この小高い道路西側の土砂を採取して線路の土盛りをしたようである。そして、この土砂採取の折に多くの遺物が発見された。縄文土器、石器のほか勾玉、切子玉等も発見され、古墳が存在したことを示している。更には八稜鏡も2面発見された。明治時代末から大正時代初めは、縄文時代人=アイヌ人説が広まっていた。縄文土器や石器はアイヌ人の使用によるものとの説が一般にも広まり、識者の古代への関心が高まっていた時期であった。岡山にも古代の遺物に興味をもち、村内各地の遺物を丹念に蒐集しておられた人物が二人いた。その一人は、いうまでもなく上桑名川の医師渡辺喜平次氏であり、他の一人は温井在住の北条幸作氏である。

この二人によって、東原出土の遺物は採集保存された。勿論作業に従事した人夫より手に入れられたものである。このうち、渡辺氏蒐集の遺物は、藤森栄一氏の知る所となり、昭和9年史前学雑誌第6巻6号で「信濃下水内郡鳴沢頭の土器及び石鏃」という題で鳴沢頭出土遺物の資料紹介をされている。その文章の末尾に「信濃では稀有な加曾利B式を中心とする遺物で……」と渡辺喜平次氏蒐集の東原出土遺物について述べられている。東原遺跡の存在が学界に初めて知られるにいたった記念すべきものであろう。

昭和18年藤森栄一氏は「信濃下水内郡桑名川の土器」という題で人類学雑誌58巻3号で渡辺喜平次氏蒐集の東原出土遺物を詳細に報告している。ここに東原遺跡が、県内でも縄文後期の著名な遺跡として知られるにいたったのである。

さて、渡辺喜平次氏が蒐集された遺物は、どうなったであろうか。氏の死亡とともに多くは人手に渡ってしまったらしい。ただ一部が岡山小学校に寄付されたようである。私は昭和32年夏下水内郡下の踏査を試みた。その折、岡山小学校に立寄り理科室で東原出土の浅鉢形土器や鉢形土器、石器類を視た。これが恐らく渡辺氏が寄付されたものであろう。これらの遺物は、岡山小学校の改築とともに姿を消してしまっている。一方、北条幸作氏蒐集の遺物は現在で保存されている。渡辺氏の蒐集に比較すれば、いたって少量であるが。

さて、東原遺跡が再び脚光を浴びるのは第二次大戦後である。第二次大戦後、科学的歴史の確立を目指

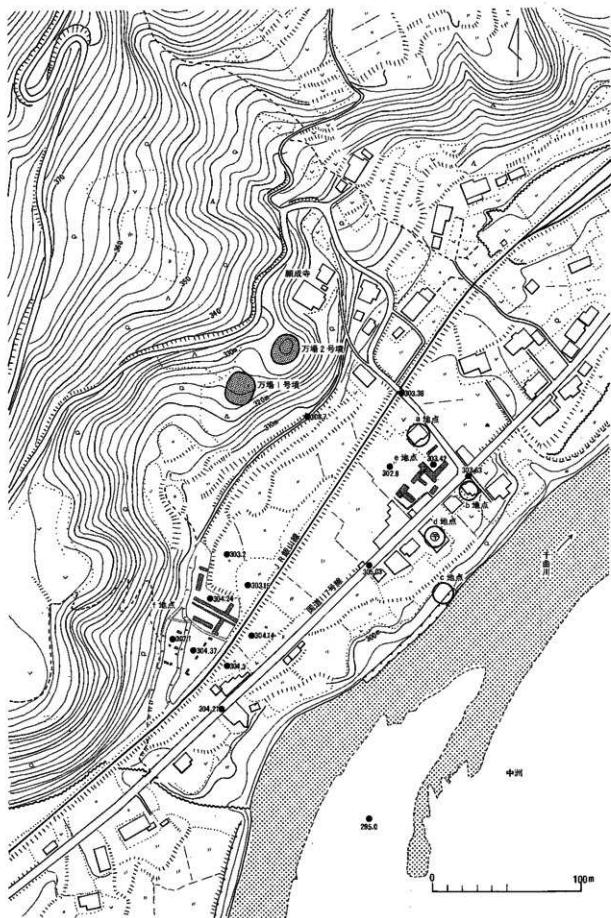


図2 調査地周辺の地形 (1:2500)

して、考古学研究が各地で盛んに行われるようになった。その波は、飯山地方にも当然波及した。飯山北高等学校では、森山茂夫、小田切茂、清水亨、田中清見氏等が中心となり郷土史研究会が設立された。この内、森山、清水氏は長峰を中心に、田中清見氏は有尾中心に、小田切茂氏は東原中心にというように自らフィールドが決まったらしい。

小田切茂氏は、実家の近くということもあって、東原遺跡に興味と関心を持ち、森山茂夫氏等と昭和24年7・8・11・12月と4回にわたって発掘調査を行っている。小田切氏が行った発掘は3地点にわたっている。a地点(北部)、b地点(東部)、c地点(南東部の川沿い)である。b地点で安山岩の平石で囲んだ炉址を発見している。各地点から縄文中期後半の土器、縄文後期土器、石皿、石鉢、石錘、石錐、石鏝、軽石製浮石、土鏝等多量の遺物が発見された。発見された遺物は、現在飯山市埋文センター、小田切茂氏宅に保管されている。そして、調査の結果は、長野県飯山北高等学校郷土研究会より「昭和24年度地下水内郡遺跡発掘調査報告」とし発刊されている。このことについては、宮坂英武氏も日本考古学年報2(昭和29年度発行)に大略を紹介している。

昭和27年晩秋、飯山北高等学校郷土研究会は、神田五六氏を指導者として現郵便局の位置付近を発掘調査した。(d地点)そして、配石遺構と思われるものを発見し、縄文中期後半、縄文後期の土器を多量に発見した。小田切茂氏は、この調査を境に自分の仕事に専念され、考古学から去っていかれた。以後、東原遺跡は縄文後期の代表的遺跡として知られるだけで、何等の調査も行われなかった。かつてはきれいに手入れされていた畑も、一部はすっかり荒れ果てて雑草地と化している。近々、東原遺跡上に大規模な築堤工事が行われるようである。その折には、また調査が行われるであろう。どのような遺構、遺物が出土するのか期待の大ききとともに、重要な市内の遺跡がまた一つ消えていく。複雑な心境である。

B 昭和24(1949)年出土遺物(図3・4)

昭和24年に飯山北高校郷土研究会が発掘した遺物の一部が残されていたので、ここで紹介する。24年の発掘はa～cの3地点を調査している。図示したもののうち13のコップ形土器がa地点出土品であるほかはすべてc地点出土品である。

1～4は中期後葉加曾利E式併行期に比定される。1は微隆起線文で渦状の文様を施文する。口縁部が内湾する浅鉢であろう。砂粒を多く含む軟質で茶色を呈する。2は3条の隆起線文と羽状の集合沈線文をもつもので、新潟県に類例がある。砂粒を多量に含む淡茶色を呈する。3も羽状の集合条線文をもつもので当期に含める。砂粒を多量に含む茶色を呈する。4は沈線と、渦状の半隆起線文をもつ口縁部片である。胎土・色調ともに2と近似する。

5は波状口縁で、刻み目文帯の間に隆起線による口唇状の浮文を配している。中期の所産であろう。胎土に砂粒を多量に含む淡褐色を呈する。

6～12は後期前葉の堀ノ内式併行期に比定される。6は頸部に2条の刻み目突帯をもち、胴部は沈線で区画された磨消縄文による垂下文と「J」字状風の文様を配する。内面は丁寧に磨かれている。胎土に砂粒を含み茶色～暗茶褐色を呈する。7は波状口縁の頂部片で、口縁端部を肥厚させその内外面に沈線文を配し、外面頂部に円形刺突文を置きその下に刻み目突帯を垂下させている。胎土に砂粒を含み黄灰色を呈する。8は横位の帯縄文と、沈線文で囲む刺突文をもつ。胎土に砂粒を多量に含む黒灰色を呈する。9は波状口縁の深鉢で、口縁下に刻み目隆帯をもつ。頂部には3連の鎖状文を配する。磨消し縄文の文様は菱形が縦に連結するものと考えられる。内面は丁寧に磨かれている。胎土に砂粒を含み黒灰色を呈する。10は横位の帯縄文をもつ厚手の口縁片である。内面は丁寧に磨かれている。雲母・細砂を多量に含む暗褐色を呈する。11は口縁下に「8」字状の浮文と刻み目隆帯を配し、その下に帯縄文をもつ。文様モチーフは

「()」と斜線が交互に配されるものと考えられる。口縁端部は内傾し内側に1条の凹部を作る。また、「8」字状浮き文の内側に円形刺突と輪状の突起をもつ。内面は丁寧に磨かれる。胎土に砂粒を含み黒灰色を呈する。12は形態・文様パターンともに11に等しい。ただし帯縄文は溝状文である。胎土に砂粒を多量に含み茶褐色を呈する。

以上の堀ノ内式併行期のものうち6～8は古い段階に、9～12は新しい段階に位置づけられる。

13～16は後期中葉の加曾利B式併行期に比定される。13は完形のコップ形土器で、浅い沈線によって加曾利B式に特徴的な紐文様が配される。口縁端部の一部に刻み目状の浅い押圧痕があり、その直下に沈線が1条めぐる。胎土に砂粒をあまり含まない薄手の精製土器で、黒灰色を呈する。底に網代痕がある。14もコップ形の土器だが、文様は平行沈線のみである。13に比べ胎土に砂が多く粗製である。底に粗い網代痕がある。15は溝状の突起をもつ浅鉢で、外面に加曾利B式に特徴的な「Q」字状文を配する無文帯と縄文帯をもち、内面に平行沈線文をもつ。黒灰色の精製土器である。16は頸部がくびれる浅鉢で沈線文をもつ。黒灰色の精製土器である。

17～19は底部で、17・18には網代痕がある。17・19は灰白色で砂粒を多く含む。18は暗茶褐色薄手で砂粒を含まない。

20は集合沈線文をもつ薄手の土器で、新潟県に類例があり、堀ノ内式の前段階に併行すると考えられる。胎土に砂粒を多量に含み暗茶褐色を呈する。

21は撚りの弱い無節の縄文土器である。砂粒を含み、淡黄灰色を呈する。繊維は含まない。前期の所産か。

22～25は注口土器の把手および注口部である。22は把手に「8」字状の浮文を付す。黒灰色の精製土器

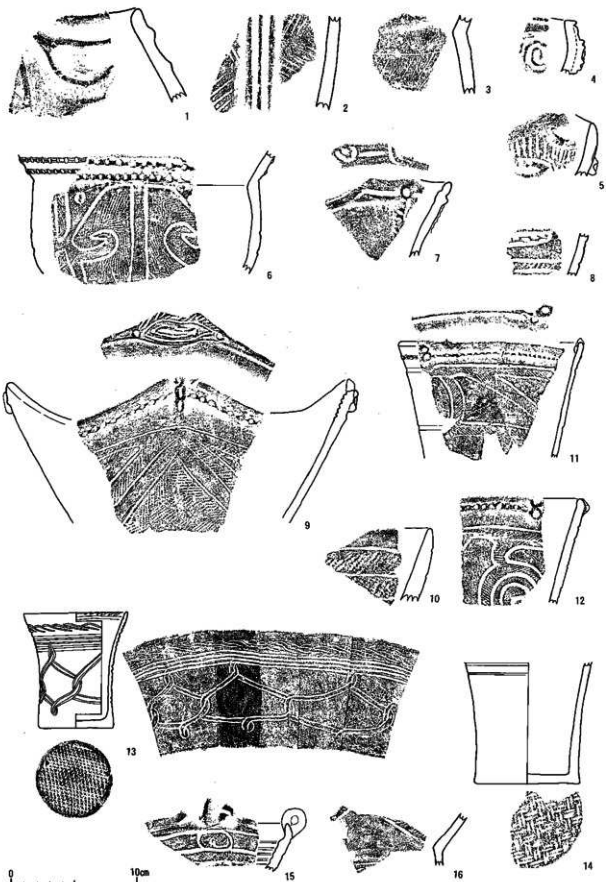


图3 昭和24年出土遺物(1) (1:3)

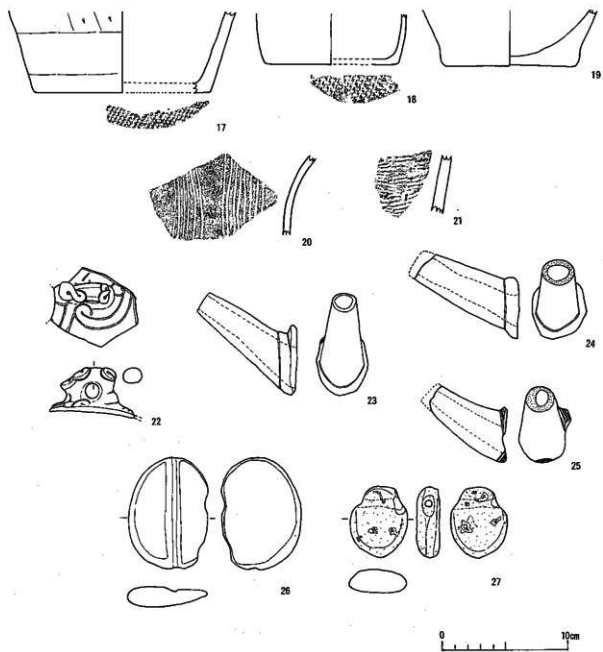


图4 昭和24年出土遺物(2) (1:3)

C 万場古墳 (図5)

遺跡西方の山麓に、県内最北に位置する古墳が2基あることが知られていたため、発掘に併行して測量調査を行った。

古墳は千曲川によって浸蝕された約200mの比高をもつ段丘崖の下麓にあり、沖積地との比高約30mを測る。古墳からは眼下に現国道117号線と千曲川を望む。

古墳は段丘崖斜面に並行して2基が心々距離で50m隔てて並ぶ。南西のものが1号墳、北東のものが2号墳と命名されている。現況は1号墳が杉の植林で頂部平坦面に祠が祀られている。2号墳は雑木林である。2号墳から北東へ下ると順成寺に至る。

測量は平板で50cm間隔の等高線を100分の1の縮尺で追った。基準杭は任意の開放トラバースを用いた。レベルはJ R 飯山線踏切の303.281mを基準とした。ただし、基準杭に高さをおとす段階で仕事にミスがあり、2号墳の等高線は10cmの位が10cmと60cmの等高線となっている。

1号墳、2号墳ともに地形を最大限に利用して築造されている。基本的には北から南へ傾斜する斜面の高位測を削り出す丘尾切断方式で築造されている。しかし現状を見ればもともと丘陵から切断された高まりをもった地形を若干削り出した可能性が高いと考えている。

両墳とも円形ないし方形に整えようという強い意識はみられない。1号墳は北・西・東斜面が直線的で方墳のように見える。しかし北東角は2号墳へ延びる尾根線にあたるために突出して角ばっているため、東・西斜面は直線的な自然地形である。2号墳も正円ではなくいびつな楕円形である。

また両墳ともに墳裾を明瞭にしていない。丘陵高位の西側はかろうじて墳裾が認められる。1号墳は325.5m等高線付近、2号墳は331.10m等高線付近である。しかし丘陵低位側は墳裾が明瞭でなくそのまま自然地形へと続く。ただし墳丘の立面観は量感がある。側面あるいは丘陵低位側から見ると自然地形をも墳丘と見え、こんもりとしている。

墳頂平坦面は、1号墳は祠があるためか13m×10mの明瞭な平坦面がある。盗掘等の跡はない。2号墳は墳頂平坦面が認められない。

墳丘の規模は先述した理由で不明確だが、高位側の裾を参考にすれば、1号墳が南北約25m×東西約20m、高さ約2.9m、2号墳が北東-南西約19m×北西-南東約16m、高さ約2.8mと推定される。

出土遺物の伝承はなく、内部施設も不明である。表面観察からは葺石・埴輪等の外部施設は認められない。

東原遺跡で飯山鉄道敷設の際に、勾玉・管玉・切子玉・直刀などの古墳の副葬品と考えられる遺物が出土している。したがって良好な水田可耕地をもち、冬季の多雪というきびしい自然条件下にある当地域にも古墳が築造されていたことは確実である。今回測量した万場古墳も古墳と考えてよいであろう。述べたように県内最北に位置し、きびしい自然条件下にある当地域に古墳文化が波及した証である万場古墳は重要な遺産である。

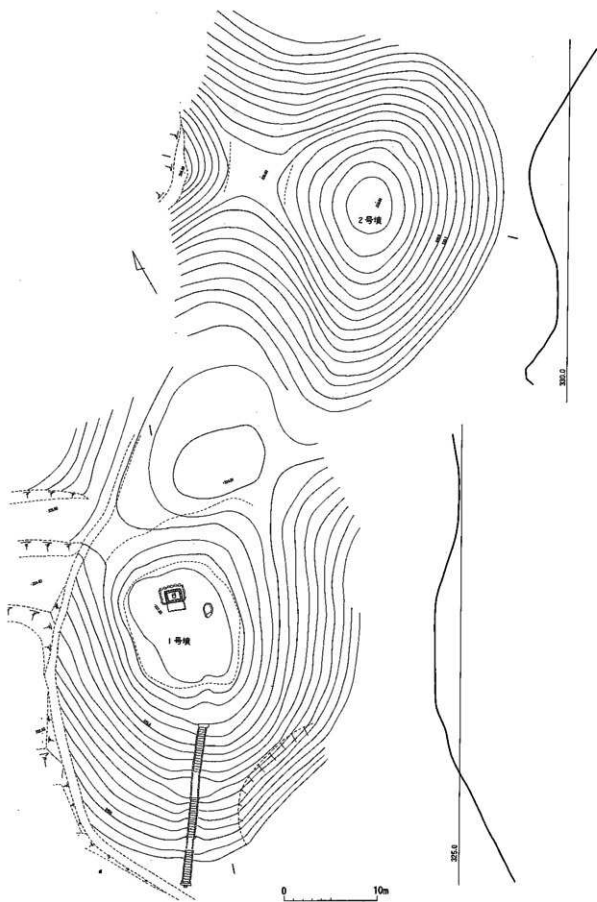


图5 万场古墩测量图 (1:400)

2 調査区の概要

A 調査区の位置と地形

今回の調査対象地はかつて昭和24年・27年に発掘が行われた地点のJ R飯山線をさんだ北西側である。地形的には西側が山麓の沢状地で東側が低湿地であり、南西隅に周囲の水田から約1 m程高い微高地がある。今回の調査はこの微高地を試掘した。

これまで東原遺跡の範囲は漠然と桑名川郵便局を中心とした小高い丘と考えられていたが厳密には確定していたわけではない。したがって今回の調査地も東原遺跡と呼称し、調査地点名も過去の調査を踏襲してf地点とした。ただし調査時には東原遺跡の西端にあるとして遺物取り上げの略名は東原西区の略であるHHWとしておいた。

B 試掘坑の概要

調査した微高地は南北約85m、東西約35mの広がりを持ち、東をJ R飯山線で画され、西は山地である。北は約1 mの比高をもって低湿地に接する。西南部に幅約10m、長約65mの比高約3 mの段があり、ここを段上部とする。

試掘坑は微高地および段上部全面の様相がわかるように小トレンチを設定した。延べ面積は約240㎡である。

段上部は休耕地で雑草が繁っていた。試掘坑は5ヶ所設けた。いずれも30~50cmの耕作土直下が黄褐色粘質土に礫を含む地山層である。地山は東つまり谷側が低い。遺物、遺構ともに検出されなかった。斜面を削って段を設け耕作地とした所と判断した。

微高地には幅2.5mの試掘坑をまず「+」字に設定したのちに、その間に任意に設定した。

南の4ヶ所の幅1 mの試掘坑は約20cmの耕作土下に約20cmの床土があり、その下は灰色の砂層であった。砂層は帯水層で掘った直後に浸水した。遺構・遺物は検出されなかった。

最も広く調査した北東部の基本的な土層は(図8)、約20cmの耕作土下に礫を含む黄褐色粘質土(厚さ約60cm、置土)、黒灰色泥土であり、黒灰色泥土は帯水層で掘った直後に浸水した。地山は山寄りの西端で確認された。灰白色粘土と黄褐色粘質土で東へ向かって傾斜している。遺構は検出されていない。遺物は、縄文土器1片・元豊通宝が調査地北端の試掘坑から、寛永通宝と小刀が北東中央の試掘坑の置土上面から出土している。

以上の試掘調査からこの微高地はもとは湿地帯で、そこを埋め立てて耕作地とした所と認定した。

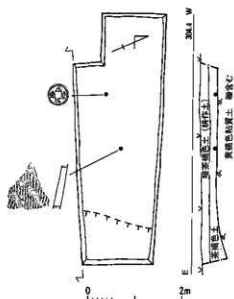


図6 銭貨・縄文土器出土位置 (1:80)

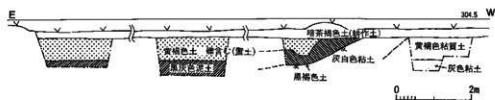


図8 土層模式図 (1:100)

C 出土遺物

1は北端の試掘坑の地山上面から出土した縄文土器である。縄文を縄文帯と無文帯に分かれるように施文したもので、中期後葉から後期前葉の深鉢と考えている。胎土に砂粒を多量に含み、黄褐色を呈する。内面は丁寧に調整され平滑である。焼成も良好。

2は1と同じ試掘坑の地山上面から出土した「元豊通宝」である。直径2.32cm、重さ2.4g。外縁の幅が不揃いである。北宋元豊元年(1078)初鑄。

3は北東中央試掘坑の置土上面で出土した「寛永通宝」である。直径2.25cm、重さ2.1g。日本寛永13年(1636)初鑄。

4は鉄製の刀子状の刃器である。糸切り鋏の一方の破片かもしれない。3と同じ試掘坑の置土上面で出土した。

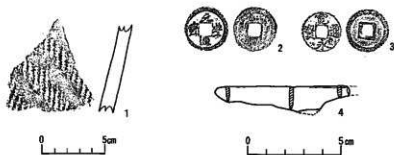


図9 出土遺物 (1 1:3 2~4 1:2)

第4章 ま と め

東原遺跡は、長野県下でも縄文後期の大道跡として古くから有名であった。

今回、中山間地域農村活性化総合整備事業が行われることとなった。東原遺跡は、有名なわりには分布範囲が明確に把握されていなかった。そのため、どこが分布の限界なのか全く不明瞭であった。

試掘調査を行った地点は、岡山上段と呼称されている段丘崖下の微高地であった。圃場整備が行われる地域は、岡山上段の段丘崖と千曲川に面した小段丘とによって画された低湿地帯にあたっている。千曲川に面した小段丘全体に遺跡が存在することは、先人達によって確認されているが、低湿地帯を介した西北側の段丘崖下に存在する微高地にも遺跡が存在するのかどうかは判然としていなかった。従って、今回の試掘調査は段丘崖下微高地上の遺跡存否確認のためのものであった。

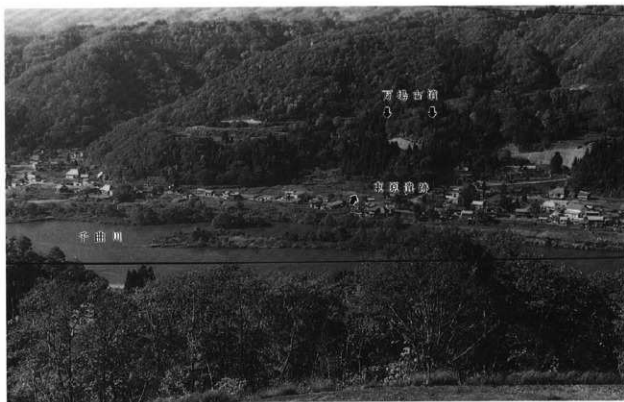
調査の結果、試掘を行った段丘崖下の微高地自体がもともとは湿地帯であり、埋め立てられて耕地化された場所であることが判明した。すなわち、段丘崖下の微高地には遺跡が存在しないことが確認されたわけである。従って、東原遺跡の範囲は、千曲川を臨む小段丘面全体に限定されることが明らかにされたといえる。

調査の結果、遺構は全く発見できなかったが、縄文土器片、古銭、刀子状刃器等若干の遺物が出土している。恐らく埋土の際に混入したものと思われる。

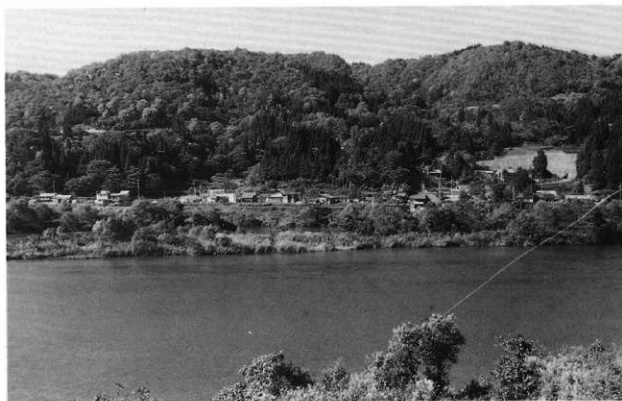
今回の調査で、市川谷最北端の馬場古墳2基の実測と飯山北高等学校郷土研究会が、昭和24年発掘調査した遺物の一部を紹介することができたことは、調査に伴う副次的産物とはいえ大きな意義があるといえよう。

ご多忙の中、試掘調査にあたってご協力賜った圃場整備実行委員長小田切祥時氏、馬場長平田辰男氏をはじめとする地元の役員さん、直接調査に従事された作業員の皆さんに心よりお礼申し上げます。

PLATE



▲ 道跡遠望 (対岸野沢オートレース場より 1994. 11. 8)



▲ 道跡遠望 (対岸117号バイパスより)



◀ 調査地 試験坑の設定（西から）



▲ 万場1号墳（北から）



◀ 万場2号墳（南から）



◀ 段上の刈りはらい（北から）



◀ 段上の試験調査（南から）



◀ 微高地北東部の調査（西から）



◀ 微高地北東部中央の調査（北西から）



◀ 微高地北端の調査（北から）



◀ 微高地北東部中央の調査（北西から）



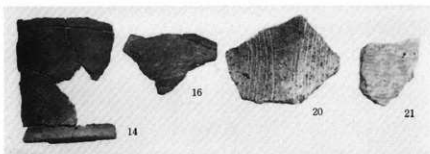
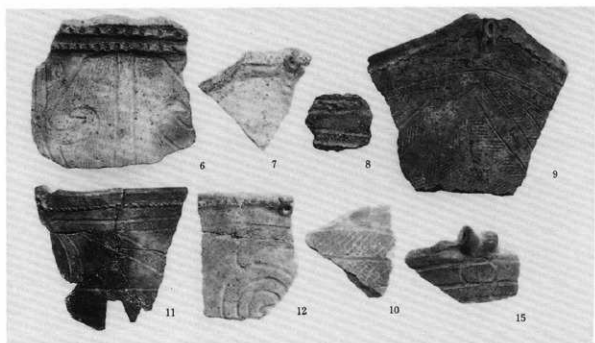
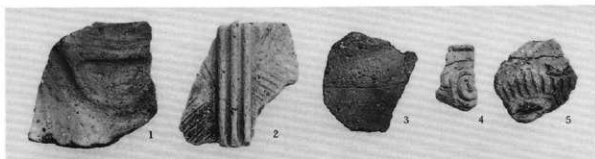
◀ 微高地北東中央断ら割り西端
(北から)

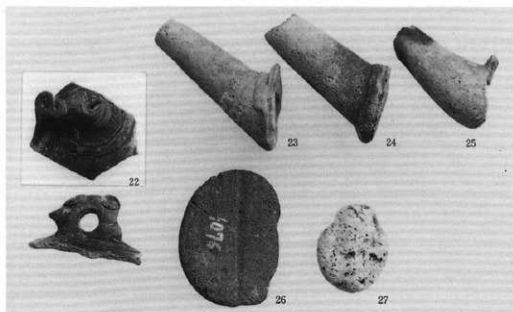


◀ 同上 中央
(北から)

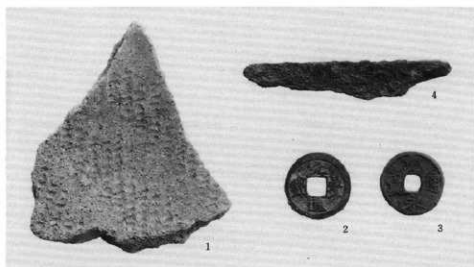


◀ 同上 東端
(北から)





◀ 既出遺物



◀ 出土遺物

飯山市埋蔵文化財調査報告 第46集

東原遺跡Ⅳ

—中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う試掘調査報告書—

平成7年3月10日発行

発行者 飯山市大字飯山1110-1
編集者 飯山市教育委員会

印刷所 長野市柳原2133-5
ほおずき書籍館

